

学校施設整備にあたっての考え方①

これからの武蔵野市の学校教育に求められる目標と施策の基本的な方向性

(1) 学習や教育の変化に対応し、主体的・対話的で深い学びができる施設

「武蔵野市学校施設整備基本計画」では、これからの武蔵野市の学校教育に求められる目標と施策の基本的な方向性を示しています。

本計画では、これまでも大切にしてきた「生きる力」を育む教育を一層推進するとともに、子どもたちが様々な変化に主体的に向き合い、他者と協働して課題を解決していく力などを十分に身に付けられるよう、教育活動を展開していくこととしています。

そして、この理念のもと、施策の基本的な考え方の第一に「これからの時代に求められる資質・能力を育む教育」を掲げています。

このような教育理念のもと展開される学校での学びは、主体的・対話的で深い学びの視点から、絶えず改善されていくものです。授業形態としては、一斉指導だけでなく、チームティーチング、個別学習、習熟度別・少人数指導、グループ学習など、多様な指導方法、学び方が想定されます。また、ICT環境など学習ツールの変化に加え、学校図書館など多様な場における学びも視野に入れる必要があります。

今後は、こうした学びの多様化に対応できる教育空間として、「学習や教育の変化に対応し、主体的・対話的で深い学びができる施設」が求められます。そのための学校施設整備に向けた考え方として、本計画では、「多様な学習形態を可能とする教室・教室まわり」

「主体的な学習活動を支援するラーニングコモنزの整備」「ICT環境の充実」「教科教育の充実のための特別教室・特別教室まわり」「学校環境の変化に柔軟に対応できる施設計画」「インクルーシブ教育システムの構築に資する施設」を整備することとしています。

(2) 新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について（文部科学省）

文部科学省では、新たな教育ニーズの対応として、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を求められております。

国の「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について」（令和4（2022）年3月）の中には、新しい時代の学びを実現する学校施設の姿として、“Schools for the Future”が掲げられています。“Schools for the Future”では、「未来思考」により実空間の価値を捉え直し、学校施設全体を学びの場として創造することが示されています。個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるために、柔軟で創造的な学習を実現することが重要であるとされています。そのためには、「学校施設全体を学習に利用するという発想に立ち、児童生徒の主体的な活動を喚起し、求められる学び・活動の変化に柔軟に対応できる空間」を整備することが求められています。加えて、空間相互の連続性や一体性を確保すること、時代の変化に対応し、将来の学習内容・学習形態の変化に応じて変更可能な室空間とすることなどが重要とされています。また、多様な学習活動に対応できる空間の具体的な整備の事例として、多目的スペースの設置や普通教室に可動式の仕切りを活用すること、校内・屋外の様々な空間や異なる教科ゾーンと有機的に連携するために、異なる教科ゾーンを連携させ、より幅広い教科等横断的なゾーンとして機能させることなどが示されています。さらに、多様な学習・活動に対応する観点から、活動に対応して自由に場所を選べる空間を設けたり、個人で集中したり、オンラインの活動を快適に行うことができる小空間を設けることも有効とされています。

特に、学校図書館を核として読書・学習・情報センターとしての役割を持たせる「ラーニングコモنز」を整備し、ICTを活用することで、調べる・まとめる・発表するなどの学習活動が効果的かつ効率的に行えるとされています。さらに、どの教室からも利用しやすいよう、学校図書館を学校の中心に計画し、より一層の活用を図ることで、各教科における調べ学習での活用や、子どもたちの自主的・自発的な学習を促すことが可能とされています。

”Schools for the Future”からの学びの場のイメージ

①1人1台端末環境等に対応したゆとりのある教室の整備



②多目的スペースの活用による多様な学習活動への柔軟な対応



③ロッカースペース等の配置の工夫等による教室空間の有効活用



④学校図書館とコンピュータ教室と組み合わせて読書・学習・情報のセンターとなる「ラーニングcommons」としていく姿



⑤単一的な機能・特定の教科等に捉われず、横断的な学び、多目的な学びに対応できるよう、創造的な空間に転換していく姿



⑥学校施設全体を学びの場として捉え、階段状の空間を、ステージやプロジェクタ等を備えた発表・表現の場としていく姿



⑦映像編集やオンライン会議のためのスタジオ機能、ラウンジのある執務空間



⑧常時ICTが活用できる環境を整備し、教職員が円滑に執務、打合せ、協働作業等を行うことができる執務空間としていく姿



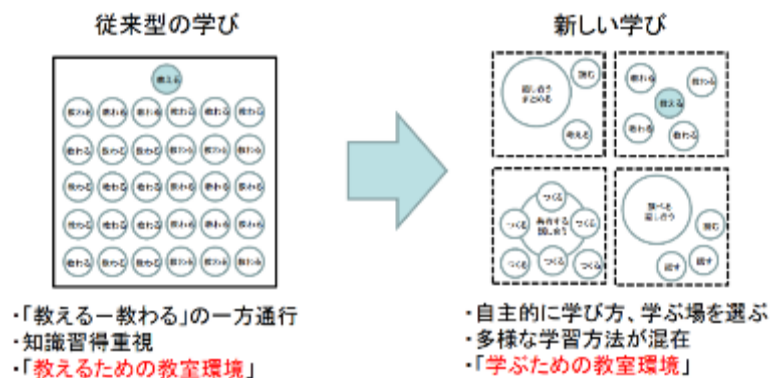
(3) 新しい時代の学びを実現する学校施設の具体的な空間整備

これまでの学習指導要領は、主に学習内容を中心に示されており、授業は「先生が教え、児童・生徒が聞く」一方通行の講義形式（従来型の授業）の指導が中心となりがちでした。一方、新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が重視され、従来の「何を学ぶか」に加え、「どのように学ぶか」という学び方の視点がより明確に示されました。

その結果、個別学習やグループによる課題解決型学習、探究学習など、多様な学習形態を取り入れた授業が求められ、教室や学習空間の在り方も変化しています。

今後は、従来型の固定的な教室形態でなく、アクティブ・ラーニングに対応できるフレキシブルな空間が求められています。

○授業形態の変化



(4) 新たな教育ニーズに対応した学校施設の在り方(中学校編)

まず中学校の「新たな教育ニーズに対応した学校施設の在り方」については、最初の学校改築であった第一中、第五中の設計において一つの方向性を整理しました。

設計では、「主体的・対話的で深い学びの活性化、個別最適な学び・協働的な学びを促す空間づくり」と、「校舎全体をゆるやかにつなぐ学びの空間整備」とを両輪で進めました。

具体的には、学びの多様化に対応するため、教科等横断的な学習や創造的活動にも活用できる教育空間として、読書・学習・情報センターとしての役割を持つ学校図書館と多目的室からなる開放的なラーニングコモンスを校舎の中心に配置し、さらに普通教室と学年コモンス（学年多目的室）、特別教室と特別教室コモンスを組み合わせ、それらをステップ（吹抜け大階段）によって校舎全体をゆるやかにつないでいます。

開放的なラーニングコモンスを校舎の中心に配置することで、学びとの出会い・興味・楽しさを生み出すとともに、交流・刺激・遊びを誘発することが期待されます。さらに、多様な空間を連続的に配置することで、生徒自らが学びの場を見つけ主体的な学び方を可能にするなど、学びの多様化に対応した教育空間を実現します。

以上のことから、普通教室、学年コモンス、ラーニングコモンス、特別教室（+特別教室コモンス）の4つの空間整備と、これらが連続してつながる装置（ステップ/吹抜け大階段）が重要と考えます。

『コモンス』とは…“集まる場所”、“共有する広場”を意味し、“生徒の自主的・主体的な活動を促す場”という意味も含む

(以下一中の事例)

■普通教室(+可動間仕切壁)

普通教室については、多様な学習内容・学習形態に対応するとともに、生徒の主体的な活動を支援し、豊かな創造性を発揮できる空間とします。また、タブレット端末を置くことができる新 JIS 規格机配置し、十分な掲示スペースおよび収納スペースを確保します。廊下側は、可動間仕切りとして開放的な設えとします。



■学年コモンズ(学年多目的室)

普通教室に面し連携が容易な学年コモンズは、開放的な設えとすることで、生徒同士や教員との交流の場となります。また、個別学習、グループ学習、学年や複数の学級での集会等、多様な利用形態に対応できます。

このように、普通教室と学年コモンズの組み合わせることで、多様な授業形態への対応や生徒同士の交流の促進が図れます。



学年コモンズ
隣のクラスと合同の学年集会

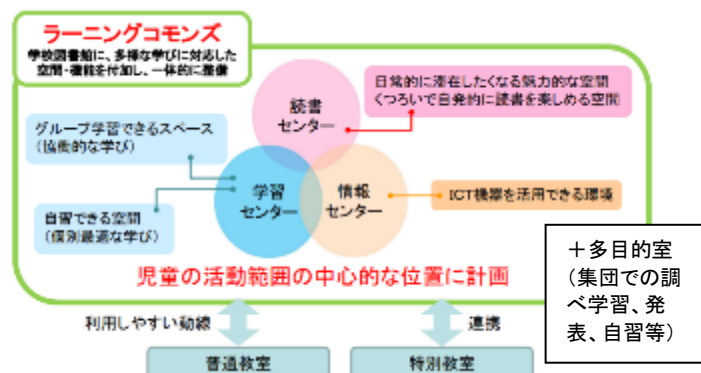
学年コモンズの
利用例



学年コモンズ
教室では入りきれないグループ学習を展開
教室と近くて使いやすい

■ラーニングコモンズ

主体的で探究的かつ協働的な学習活動を支援する場として、学校図書館の機能に加え、ICT 機器を活用できる環境を備えたラーニングコモンズを整備します。ラーニングコモンズ内には学校図書館のほか、本の閲覧、集団での調べ学習、発表、自習等に使用することのできる多目的室を併設します。



多目的室
(集団での調べ学習、発表、自習等)

■特別教室+特別教室コモンズ

中学校において、特別教室での実験や作品制作などに使用する機材、教材の充実を図ります。また、特別教室に隣接した空間に、教科の特色を生かした展示や生徒の学習成果等を掲示することで、各教科への興味・関心を喚起する特別教室コモンズを整備します。



アートコモンズ
美術や技術の授業でみんなが作った
作品を鑑賞

- 特別教室の前に特別教室コモンズ
- ・アートコモンズ+技術室・美術室
- ・サイエンスコモンズ+理科室
- ・ミュージックコモンズ+音楽室
- ・家庭科コモンズ+家庭科室
- ・スポーツコモンズ+体育館

■校舎全体をゆるやかにつなぐ学びの空間整備

これら4つの空間をゆるやかにつなぐことで、主体的・対話的で深い学びの活性化、個別最適な学び・協働的な学びを促す空間づくりが実現できます。

ラーニングコモンズを中心に、特別教室ゾーンでは特別教室（+特別教室コモンズ）が連続し、普通教室ゾーンでは学年コモンズと普通教室を廊下と一体的に連続させます。さらに、吹抜け大階段（ステップ）が各フロアをつなぎ、学校全体を学びの空間として連続させ、縦にも横にも空間をつなぐことで、「見る・見られる」の関係から、自発的な学びを促すような空間を目指します。



ラーニングコモンズ

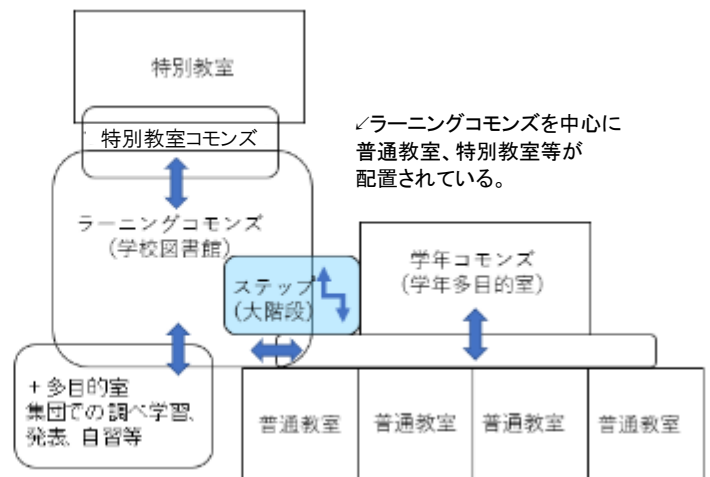
▶ラーニングコモンズを学校の中心に置き、サテライトコモンズ⇒特別教室、学年コモンズ⇒普通教室へ連続するように配置、上下階は大階段(ステップ)でつなぐ。吹抜けて上下階の様子がわかり、自発的な学びを促す。

○従来型の教室配置



◀廊下を挟んで、普通教室、特別教室等が配置されている。

○新しい時代の学びに対応する教室配置



■イメージパース



▶ステップ(大階段+吹抜け)は各フロアをつなぐ機能だけでなく、階段の一部は座ることができ、学習効果の発表、読書、友達とおしゃべりなど、様々なシーンが展開できる。

■中学校まとめ

中学校では、生徒が主体的・対話的に学ぶ力を身に付けていることから、学習内容や活動に応じた空間（普通教室、学年コモンズ、ラーニングコモンズ、特別教室＋特別教室コモンズ）を選択し、多様な空間を移動しながら学ぶことが可能です。特に、学年コモンズは、普通教室に近接し、個別学習、グループ学習、学年や複数の学級での集会など多様な活動に対応できる重要な役割を担うことから、各学年に整備します。

(5)新たな教育ニーズに対応した学校建築の在り方(小学校編)

小学校では、1年生から6年生まで成長の度合いが大きく違うことが特徴です。小学校においては普通教室が学習生活の拠点となり、特に低学年では特別教室での授業が少なく、普通教室での授業が多くを占めます。そのため、普通教室の延長として活用でき、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる上で、多様な学習活動に柔軟に対応できる空間の整備が重要であり、普通教室と連携した「オープンスペース」を効果的に配置することが、計画のポイントであると考えます。

(以下五小・井之頭小の事例)

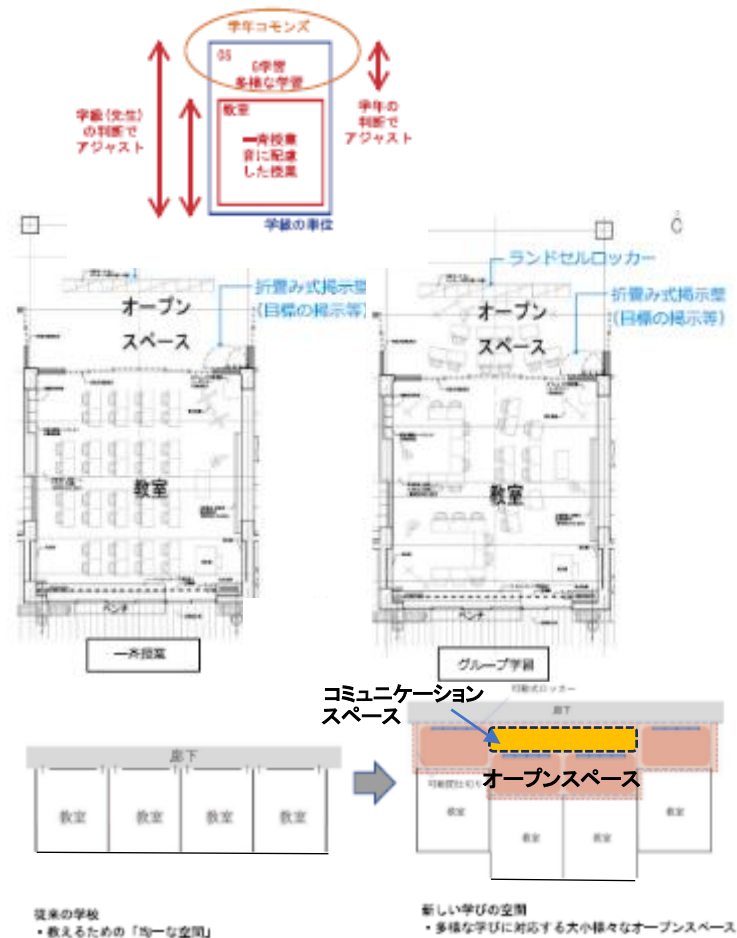
■オープンスペースの配置

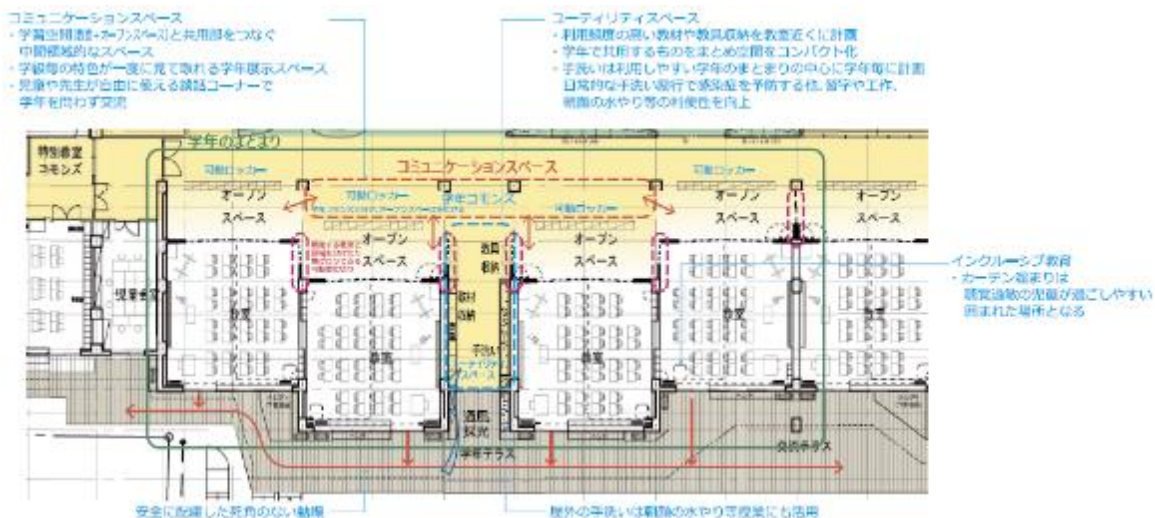
普通教室の前にオープンスペースを配置することで、多様な学習活動への柔軟な対応ができます。

まず、従来の教室型の授業スタイルが基本にあります。そして、オープンスペース側は可動間仕切りを設け、この可動間仕切りを開放して空間を拡張することによって、グループ学習では自由に机を並べ替えたり、車座になって床に座り話し合ったりすることができます。また、個別に調べ学習をするときには自分の好きな場所で、自由なスタイルで学習することができます。その際、ラーニングコモンズに行き、必要な資料を探すこともできます。こうした学びの広がり、空間が連続し、開かれた構成となっていることで実現できます。

今回、五小・井之頭小の設計では、さらに教室を雁行（教室をずらして配置）することにより、コーナーが生まれ、空間に変化を持たせることで多様な活動の場を引き出しています。特に中央部は学年単位で活用できるコミュニケーションスペースを創出しています。

オープンスペースの配置には幾つかの考え方があり、オープンスペースを点在させ、様々な居場所を提供する方法もあり、それぞれの小学校の改築条件によって、オープンスペースの取り方については設計段階で検討する必要があります。





■空間構成(校舎全体をゆるやかにつなぐ学びの空間整備)

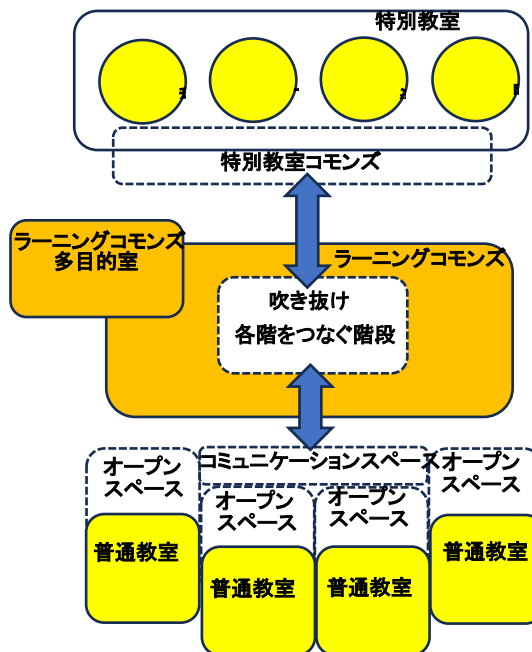
小学校の空間構成は、ラーニングコモンズを中心に、「普通教室＋オープンスペース」のユニットで囲むことにより、児童がいつでも調べ学習ができる環境が整います。

また、普通教室⇒オープンスペース⇒ラーニングコモンズと連続する空間構成に加え、ラーニングコモンズ⇒特別教室(＋特別教室コモンズ)へも連続する構成とすることで、主体的・対話的で深い学びの活性化を図り、個別最適な学び・協働的な学びを促す空間づくりを実現します。

さらに、吹抜け大階段が各フロアをつなぎ、学校全体を学びの空間として連続させ、縦にも横にも空間をつなぐことで、「見る・見られる」関係が生まれ、児童の自発的な学びを促す空間を目指します。



○新しい時代の学びに対応する教室配置(小学校)



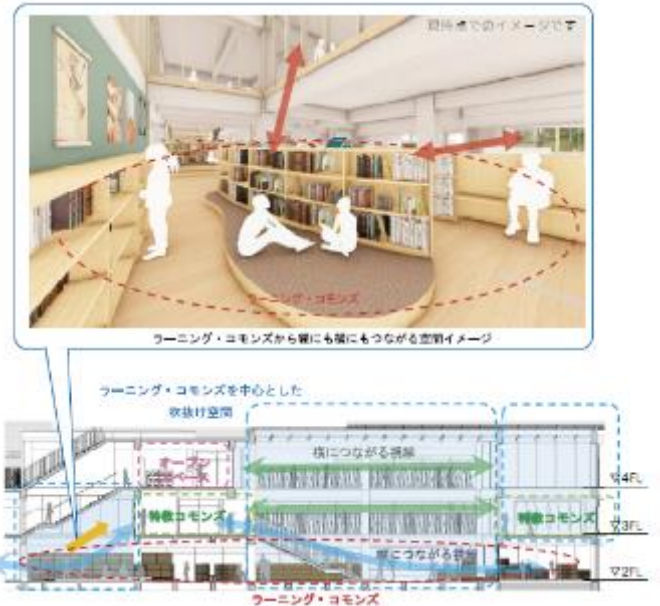
学校図書		特別教室	
廊下			
普通教室	普通教室	普通教室	普通教室

「廊下を挟んで、普通教室、特別教室等が配置されている。」

■小学校まとめ

小学校については、普通教室がホームグラウンドであり、多様な学習活動に柔軟に対応できる空間の整備が重要です。その中でも、普通教室と連携した「オープンスペース」の確保は、小学校では特に重要です。

また、「普通教室+オープンスペース」から「ラーニングcommons」、さらに「特別教室(+特別教室commons)」へと空間が連続する構成を基本とし、児童の学習意欲が高まるような空間づくりを目指します。



(6) 校務センター

教員の多忙化は社会問題になっており、働き方改革を支援する観点から、職員室廻りの環境整備も重要な要素になっています。

学び方の変化、生徒や教職員数の増減、年齢構成や勤務形態の多様化など、近年、教職員を取り巻く環境はめまぐるしく変化しています。そのため、職員室廻りの環境整備においては、教職員同士、あるいは教職員と児童生徒のコミュニケーションが取りやすいこと、組織や人数の変化に柔軟に対応できること、効率的な家具や収納が整備されていることが求められます。そして、これらの機能性と柔軟性を備えた職員室機能を一体的に整備し、開かれた空間として運用できる「校務センター化」を図ることを基本とします。

